

日本キリスト教会 大阪北教会

2016年6月19日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書11章1～16節

01 ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。02 このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。03 姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気になるのです」と言わせた。04 イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」05 イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。06 ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。07 それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」08 弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」09 イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。10 しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。」11 こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」12 弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。13 イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。14 そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。15 わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」16 すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。

説教『わたしは彼を起こしに行く』

◆私たちは今、司会の安藤長老がお祈りをされたそのお祈り一つ一つにアーメンと心の中で唱和いたしました。本当にわたしたちの人生は試練なしに過ごすことはできません。そして人生の終わりは死であります。今日は日曜学校で山上の説教の締めくくりのところを子どもたちと一緒に読みました。砂の上に家を建てた者は、イエス様のお言葉を聞いても行わない人で、試練に遭うと倒れてしまう。しかしイエス様のお言葉を聞いて行う者は、どのような試練に遭っても倒れることはないということです。

◆それで私たちがこのように主の日の礼拝を守るといふことは、キリスト者として当然のことです。しかしながら、礼拝を守るといふこと、また信仰を持続するといふことは、よくよく考えれば、これは命がけのことです。今日もいつものように礼拝を守っておりますが、そこに座っておられます池田禮子姉は、先週の礼拝の帰途、雨降りりで、家のそばで転ばれ

て、頭を打たれました。ちょうど同じマンションの方がおられて救急車を呼んでくださって、救急病院で治療を受けられました。それで5時ごろお電話いただきました。「今帰ってきました」と、いつもより元気なお声で、知らせて頂いたので、分かるようなことで、それぞれの身に、いつ何が起こるか、分りません。いずれにせよ生きて行くことは大変です。雨の日も、暑い日も、寒い日も、この教会に礼拝を守るために来るということは、だんだんと身にこたえてくるようになると思います。いずれにしてもわたしたちの信仰は命がけのものであります。

◆今日はヨハネによる福音書の11章です。「ラザロの死」という小見出しが付いています。17節以下は「イエスは復活と命」。28節以下は「イエス、涙を流す」、その次は「イエス、ラザロを生き返らせる」。そして45節以下は「イエスを殺す計画」。そして12章に入りますと、「ベタニアで香油を注がれる」となっており、12章9節以下は「ラザロに対する陰謀」となっております。イエス・キリストのみならず、ラザロをも殺そうと、ユダヤ教の当局者は考えています。なぜならばラザロが甦ったことで、イエス様を信じる者が沢山起こったからです。改めてここを読みますと、信仰に与ることに勝る幸いはないのですが、信仰に生きるということは文字通り命がけのことだと、改めて思い知らされました。

◆さて、今日のラザロの姉妹、マルタとマリアについてわたしたちは比較的よく知っております。彼女たちはエルサレム郊外の「ベタニア」に住んでいました。イエス様は毎年、聖都エルサレムで祭りを祝われました。そしてこの3姉弟に出会われたのです。そして行き、帰りにマルタ・マリアの家に立ち寄られて良き時を過ごされたことは聖書全体から伺うことができます。そして今日の直前の10章の終わりにはこう記されております。「40 イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行って、そこに滞在された」と。そこも地名は「ベタニア」ですが、これは「ヨルダンの向こう側」のベタニアです。ここはエルサレムからは一日、二日の距離です。この「ベタニア」という地名については何度か話してきました。「悩める者の家」とか「苦しむ者の家」、あるいは「貧しい者の家」等々を意味する地名です。そのベタニアにイエス様は退かれたわけでありまして。ユダヤ人たちが主イエスを石で打ち殺そうとしたので、それを避けて、このベタニアに退かれたのであります。

◆皆さんそれぞれに母教会、洗礼を受けた教会があります。皆さんは洗礼を受けられた時に御言葉を与えられましたか。私は18歳の時、高3の時に洗礼を受けました。そして3年後、21歳の時に召しを受けて神学校へ行く事になりました。その時の与えられた御言葉は、「あなたの体を神に喜ばれる生きた聖なる供え物として捧げなさい」という御言葉でありました。それから半世紀以上経ちますが、この御言葉に真実に従って歩んできたか、自らに問う時、忸怩たるものがあります。主イエス様はヨルダン河の向こう側のベタニアで洗礼を受けられたのです。その時の様子をマルコ福音書はこのように記しております。「1:09 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。1:10 水の中から上がるとす

ぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。1:11 すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた」と。イエス様は御自身にとって、伝道活動の原点とも云うべき所に退かれたのです。

◆その途次イエス様はマルタ、マリア、ラザロの家に立ち寄られたに違いありません。そして何故「ヨルダンの向こうのベタニア」に退かれるのか、その訳をイエス様本人からか、或いは弟子達から聞いて知っていたと思います。そして今日の 11 章に来るわけです。「1 ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。2 このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。3 姉妹たちはイエスのもとに人をやって、『主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです』と言わせた。4 イエスは、それを聞いて言われた。『この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。』5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。6 ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。』

◆ここに、「このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である」と記されております。12 章の始めにこう記されております。「03 そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。04 弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。05 『なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか』」と。「三百デナリオン」は今日の相場によれば約 300 万円になります。先ほど申しましたように、「ベタニア」は、「貧しい者の家」という意味もあります。しかし時価 300 万円もする香油を注ぐということは貧しい人にできることではないですね。マルタ、マリアという名前ですが、マルタは「女主人」、マリアは「高貴な人」という意味ですから、由緒ある家系であったかもしれません。けれども何かの理由でラザロが病気になった。そしてラザロは聖書の中で一言も口を利かない人です。同じベタニア村には「シモン」という、今の言い方を使えば「ハンセン氏病」の人もいました。そういうところから、悩むと者とか苦しむ者という「ベタニア村」のイメージが、「隔離された場所」のようにも読めるわけですが、マルタ、マリア、ラザロの姉弟は、必ずしも貧しい人たちではなかったかもしれません。

◆ところがラザロが病気になります。「姉妹たちはイエスのもとに人をやって、『主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです』と言わせた。イエスはそれを聞いて言われた『この病気は死で終わるものでない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。』イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからもなお二日間同じ所に滞在された。」その後、イエス様がもう一度エルサレムに行こうということで、マルタ、マリアのベタニア村に来られた時には、ラザロが死んですでに 4 日経っていたという経過なのです。ですから「あなたの愛しておられる者が病気なのです」ということは「危

篤状態です。早くおいで下さい」という懇願ですね。そしてここで「あなたが愛しておられる者」というのは「親愛の情」を表す肉親的な「愛」を表わす「フィレオー」という言葉です。その後の、「05 イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」の方は、「アガパオー」という言葉で、神様の無類の愛を表わす言葉です。

◆けれども「06 ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された」とあります。そしてそのあと行かれたら、すでにラザロは死んでから四日経っていたということです。このベタニアからエルサレム郊外のベタニアは、普通で2日、急いで1日かかります。使わされた者も、イエス様も急いで行かれました。それが「11:17 さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた」というのは、このような経過を示しています。それで私は、「なお二日間同じ所に滞在された」事の意味は何だろうかと思いを巡らしました。この二日間、イエス様はなにをしておられたのか、想像めぐらすのですが、ここはイエス様にとって伝道の原点になった場所ですね。「05 イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」のです。ですから、イエス様は、マルタ、マリアから「早く来てください」との知らせを受けられたら、何をおいても飛んで行かれますよね。

◆私はこの会堂ができて、最初の訪問者のことを思い出しましたがけれども、ロシア圏から出稼ぎに来ている若いお嬢さん二人が訪ねて来られました。そして「お祈りさせてほしい」ということで、「どうぞ」と案内しました。前から2列目の席に座り、30分くらいお祈りされました。日本に来てしばらくなるのでしょうか、日本語も少し分かるようなので、わけを聞いてみたら、片方のお嬢さんが、「母が亡くなったと知らせを受けたけれど、急なことなので、すぐに帰るわけにいかなくて、教会でお祈りさせてもらいたくて来ました」ということでした。友人が彼女の肩に手を置いて祈る姿を、私はその後ろでじっと見ていましたが、その姿はなんとも言えないほどの祈る姿で、現実なのですが、まるで映画の1シーンを見るようでした。

◆マルタとマリアは、イエス様の御愛を信じ切っておりました、ですから、飛んで来て下さることを信じて疑わなかったのですが、イエス様は来てくださらなかった。その間にラザロは死んだのです。この時のマルタ、マリアの失望、落胆は、非常なものがあったと思います。今日は11章の1節から16節ですけれども、17節以下を見ますと、イエス様が来られましたね。21節「マルタはイエスに言った『主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに』」。真下の32節を見てください。マリアもこう言います。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と。マルタと全く同じことをイエス様に言っています。この言葉の中にイエス様にたいする信頼と、なぜ早く来て下さらなかったのかという訴えの気持があると思いますね。そのようなことでありまして、わたしたちは今日、この物語を読みまして、これは命がけといえますか、自分の人生の生き死にに関わって読まない、聖書は理解できないと思いました。聖書は、のんきに読めるもので

はありません。生きるか、死ぬか、この自分になお望みがあるのかどうか、そのぎりぎりのところで聖書を読まない、聖書の真相・深層は読めません。

◆そのようなことでありまして今日のヨハネ福音書 11 章のラザロにかかわる物語というのはマルタ、マリア、ラザロのことであり、またイエス様ご自身のことであり、そして弟子たちのことであり、そして私たち自身の事柄がここに語られていると思いました。わたしたちが聖書を本当に読めた時には、聖書の途上人物と自分が一体になるのですね。4 節にこうあります。「イエスは、それを聞いて言われた。『この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである』」と。「この病気は死で終わるものではない」は、以前の口語訳では「この病気は死ぬほどのものではない」という訳でまるで違うわけですね。「まあ大丈夫！」と云う風に、口語訳なら聞こえるわけです。新共同訳では「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」と訳されておりますが、この新共同訳の訳が正しい理解だと思います。

◆イエス様が「生まれつきの盲人をいやす」話が 9 章 1 節以下に出ています。「01 さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。02 弟子たちがイエスに尋ねた。『ラビ、この人が、生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。』03 イエスはお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである』」。弟子たちとイエス様の物の見方では、レベルが違う。質が違うのですね。そのようにして今日の箇所です。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光をうけるのである。」イエス様は二人の姉妹とラザロを真に愛しておられた。それでも、ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間、同じ所に滞在されて動こうとはされませんでした。この二日間イエス様はもう一度原点に戻られたのです。ヨハネから洗礼を受けられた時、「あなたはわたしの愛する子。わたしの心に適う者である」という御言葉が天から聞こえたのですね。その後のイエス様の歩みは、いつの時もこの御言葉を心に留めての言動でありました。ですからこの二日間イエス様は、今この時点で、ラザロのことも含め、本当に神様の御心に適う道は何なのかということにとことん思いを深められたのだと思います。

◆7 節以下にこうあります。「07 それから、弟子たちに言われた。『もう一度、ユダヤに行こう。』08 弟子たちは言った。『ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。』09 イエスはお答えになった。『昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。10 しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。』」昼間は日の光があるから誰もつまづかない。「しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。」この「夜歩けば」の「夜」は、試練の夜です。試練においても「人の(心の)内に光があるならば、つまづかない

ということです。その間の中でも真の光であられるイエス様がその人の心のうちにあるならば、どのような試練においても、人はつまずくことはないのです。神様のみ心に沿って歩むなら、つまずくことはないのです。このような意味になります。

◆「11 こうお話しになり、また、その後で言われた。『わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。』12 弟子たちは、『主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう』と言った。13 イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。」この11節から今日の説教題を取りました。「わたしは彼を起こしに行く」。この「起こす」というのは、「眠っているのを起こす」という意味と、「死んだ者を甦らせる」という意味と、二つの意味があります。正に言葉の二重性です。14節～16節。「14 そこでイエスは、はっきりと言われた。『ラザロは死んだのだ。15 わたしはその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。』16 すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、『わたしたちも行って、一緒に死のうではないか』と言った。」弟子達の覚悟はさすがですが、その無理解も相当なものですね。

◆わたしたちは何時、何処で、どういう最期を迎えるかは分かりません。しかしそこもまた主イエスのご配慮の真下なのです。どのような形でこの人生の終わりを迎えるにしても、その死で終わるのではないのです。無類の愛のイエス様は、「わたしの命です。私の甦りです。」わたしは今日の聖書を読んでおまして、「あなたの心の内に、何が起きても消えることのない光が輝いていますか」と、問われているのを覚えました。何があっても消えることのない光とは、イエス様以外ありません。そしてこの方は悩める者、苦しめる者と共に居て下さいます。二日間、なお滞在されたのも「ベタニア」なのですね。そして今、向かって行かれるそこもまた、「ベタニア」す。私達も今一度原点に立ち戻り、御心に適う道を歩んで行きたく思います。

◆お祈りいたします

　　憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたの御心、あなたの御業、それは私達の思いをはるかに超えて意義深いものであります。そしてそれをあなたはわたしたちに示し、それを信じ、感謝する者として下さいました。もう一度その原点に立ち戻り、御心に適う道を歩ませてください。

　　この祈り、主イエス・キリストの御名を通しみ前におささげいたします。アーメン。